

西夏語研究と法華經（Ⅰ）¹⁾

西田龍雄

1 西夏語研究における法華經の役割

1904年に刊行されたモリス（Morisse）の『法華經』の解説『西夏の文字と言語の研究に対する初歩的寄与』は、西夏語研究の歴史にとって一つの時期を画した。²⁾ まさにドゥヴェリア（Devéria）が1898年に西夏文字を認定して以後、20世紀初頭に刊行された輝かしい業績であった。それからさらに10年を経て、羅福成が『西夏訳蓮華經考釈』を世に出した（東山学社印）。当時京都に在住していた羅福成は、羽田亨博士から贈られた法華經の写真3枚（巻七）とモリスの公表した1枚（巻一）を『添品妙法蓮華經』と対照して西夏文の分析を試みた研究であった。

このように初期の西夏語研究は、いずれも法華經と深い関わりをもっていた。それにも拘らず西夏文法華經の研究は一向に進展しなかった。21世紀になっても依然としてその状況は続いている。³⁾

私は当初、法華經は西夏語研究にとって特別に役立つ特徴をもってはいないと誤解していた。その後、コズロフ収集品中に含まれる法華經の写真（巻六、巻七）を見る機会を得るに及んでこの考えは一変した。

この西夏文は、華嚴經などとは段違いに極めて重要な特色をもっていて、しかも頗る難解なのである。明らかに、華嚴經などに見られる私のいう擬漢文体から離れた別の文体をもっている。法華經から西夏語研究が発展しなかった理由は、まさにそこにあった。その西夏文は、原文である漢文とは逐字的にぴたりと一致しないばかりか、十分に読み取り得ないところを多く含む厄介な文章であった。

モリスも羅福成も、この西夏文を何故か理由は明らかではないが、『添品妙

法蓮華經』と対照していた。しかし、現存する西夏文法華經には、「姚秦三藏法師鳩摩羅什漢訳」と明記されているのである。

2 現存する西夏語訳の諸本

諸々の小断片を別にすると、次の諸本（刊本・写本）が各地に現存する。

I モリス旧蔵本を中心とする紺紙金泥の八巻本

a) ベルリン国家図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin) 蔵本

卷一、卷三、卷四、卷五、卷七の五卷紺紙金泥写本（石浜純太郎による）。^{4）}

b) パリ・ギメ博物館 (Musée Guimet) 蔵本

卷二、卷六、卷八の三卷（筆者の調査による）。⁵⁾

紺紙に金泥で流麗な書体でもって書写されている。12.3×32cm上下欄の間24.9cmの大型折本で巻二のみが帙に入っている。各巻の表紙は草色の布貼りで金粉が散りばめられている。内容は、天地親子欄一折6行、一行19字詰であり、数箇所1行分の書き込みがあるのは、筆写の際に行頭の文字が同じ文字であったために、1行乃至数行を書き落としたのを後で加えたものである。書写された年代はかなり後期であったと推測できる。

もう少し詳細に述べると、卷二は譬喩品第三、信解品第四の計101折。卷六は如来寿量品第十六、分別功德品第十七、隨喜功德品第十八、法師功德品第十九の計92折。卷八は觀世音菩薩普門品第二十五、陀羅尼品第二十六、妙莊嚴王本事品第二十七、普賢菩薩勸發品第二十八の計69折が残っている。卷八の卷頭には2折の仏画があり、その右上の隅に枠があって、枠内に𑖀𑖔𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑗀𑖿𑗁𑗂𑗃𑗄𑗅𑗆𑗇𑗈𑗉𑗊𑗋𑗌𑗍𑗎𑗏𑗐𑗑𑗒𑗓𑗔𑗕𑗖𑗗𑗘𑗙𑗚𑗛𑗜𑗝𑗞𑗟𑗠𑗡𑗢𑗣𑗤𑗥𑗦𑗧𑗨𑗩𑗪𑗫𑗬𑗭𑗮𑗯𑗰𑗱𑗲𑗳𑗴𑗵𑗶𑗷𑗸𑗹𑗺𑗻𑗼𑗽𑗾𑗿𑘀𑘁𑘂𑘃𑘄𑘅𑘆𑘇𑘈𑘉𑘊𑘋𑘌𑘍𑘎𑘏𑘐𑘑𑘒𑘓𑘔𑘕𑘖𑘗𑘘𑘙𑘚𑘛𑘜𑘝𑘞𑘟𑘠𑘡𑘢𑘣𑘤𑘥𑘦𑘧𑘨𑘩𑘪𑘫𑘬𑘭𑘮𑘯𑘰𑘱𑘲𑘳𑘴𑘵𑘶𑘷𑘸𑘹𑘺𑘻𑘼𑘽𑘾𑘿𑙀𑙁𑙂𑙃𑙄𑙅𑙆𑙇𑙈𑙉𑙊𑙋𑙌𑙍𑙎𑙏𑙐𑙑𑙒𑙓𑙔𑙕𑙖𑙗𑙘𑙙𑙚𑙛𑙜𑙝𑙞𑙟𑙠𑙡𑙢𑙣𑙤𑙥𑙦𑙧𑙨𑙩𑙪𑙫𑙬𑙭𑙮𑙯𑙰𑙱𑙲𑙳𑙴𑙵𑙶𑙷𑙸𑙹𑙺𑙻𑙼𑙽𑙾𑙿𑚀𑚁𑚂𑚃𑚄𑚅𑚆𑚇𑚈𑚉𑚊𑚋𑚌𑚍𑚎𑚏𑚐𑚑𑚒𑚓𑚔𑚕𑚖𑚗𑚘𑚙𑚚𑚛𑚜𑚝𑚞𑚟𑚠𑚡𑚢𑚣𑚤𑚥𑚦𑚧𑚨𑚩𑚪𑚫𑚬𑚭𑚮𑚯𑚰𑚱𑚲𑚳𑚴𑚵𑚷𑚶𑚸𑚹𑚺𑚻𑚼𑚽𑚾𑚿𑛀𑛁𑛂𑛃𑛄𑛅𑛆𑛇𑛈𑛉𑛊𑛋𑛌𑛍𑛎𑛏𑛐𑛑𑛒𑛓𑛔𑛕𑛖𑛗𑛘𑛙𑛚𑛛𑛜𑛝𑛞𑛟𑛠𑛡𑛢𑛣𑛤𑛥𑛦𑛧𑛨𑛩𑛪𑛫𑛬𑛭𑛮𑛯𑛰𑛱𑛲𑛳𑛴𑛵𑛶𑛷𑛸𑛹𑛺𑛻𑛼𑛽𑛾𑛿𑜀𑜁𑜂𑜃𑜄𑜅𑜆𑜇𑜈𑜉𑜊𑜋𑜌𑜍𑜎𑜏𑜐𑜑𑜒𑜓𑜔𑜕𑜖𑜗𑜘𑜙𑜚𑜛𑜜𑜝𑜞𑜟𑜠𑜡𑜢𑜣𑜤𑜥𑜦𑜧𑜨𑜩𑜪𑜫𑜬𑜭𑜮𑜯𑜰𑜱𑜲𑜳𑜴𑜵𑜶𑜷𑜸𑜹𑜺𑜻𑜼𑜽𑜾𑜿𑝀𑝁𑝂𑝃𑝄𑝅𑝆𑝇𑝈𑝉𑝊𑝋𑝌𑝍𑝎𑝏𑝐𑝑𑝒𑝓𑝔𑝕𑝖𑝗𑝘𑝙𑝚𑝛𑝜𑝝𑝞𑝟𑝠𑝡𑝢𑝣𑝤𑝥𑝦𑝧𑝨𑝩𑝪𑝫𑝬𑝭𑝮𑝯𑝰𑝱𑝲𑝳𑝴𑝵𑝶𑝷𑝸𑝹𑝺𑝻𑝼𑝽𑝾𑝿𑞀𑞁𑞂𑞃𑞄𑞅𑞆𑞇𑞈𑞉𑞊𑞋𑞌𑞍𑞎𑞏𑞐𑞑𑞒𑞓𑞔𑞕𑞖𑞗𑞘𑞙𑞚𑞛𑞜𑞝𑞞𑞟𑞠𑞡𑞢𑞣𑞤𑞥𑞦𑞧𑞨𑞩𑞪𑞫𑞬𑞭𑞮𑞯𑞰𑞱𑞲𑞳𑞴𑞵𑞶𑞷𑞸𑞹𑞺𑞻𑞼𑞽𑞾𑞿𑟀𑟁𑟂𑟃𑟄𑟅𑟆𑟇𑟈𑟉𑟊𑟋𑟌𑟍𑟎𑟏𑟐𑟑𑟒𑟓𑟔𑟕𑟖𑟗𑟘𑟙𑟚𑟛𑟜𑟝𑟞𑟟𑟠𑟡𑟢𑟣𑟤𑟥𑟦𑟧𑟨𑟩𑟪𑟫𑟬𑟭𑟮𑟯𑟰𑟱𑟲𑟳𑟴𑟵𑟶𑟷𑟸𑟹𑟺𑟻𑟼𑟽𑟾𑟿𑠀𑠁𑠂𑠃𑠄𑠅𑠆𑠇𑠈𑠉𑠊𑠋𑠌𑠍𑠎𑠏𑠐𑠑𑠒𑠓𑠔𑠕𑠖𑠗𑠘𑠙𑠚𑠛𑠜𑠝𑠞𑠟𑠠𑠡𑠢𑠣𑠤𑠥𑠦𑠧𑠨𑠩𑠪𑠫𑠬𑠭𑠮𑠯𑠰𑠱𑠲𑠳𑠴𑠵𑠶𑠷𑠸𑠺𑠹𑠻𑠼𑠽𑠾𑠿𑡀𑡁𑡂𑡃𑡄𑡅𑡆𑡇𑡈𑡉𑡊𑡋𑡌𑡍𑡎𑡏𑡐𑡑𑡒𑡓𑡔𑡕𑡖𑡗𑡘𑡙𑡚𑡛𑡜𑡝𑡞𑡟𑡠𑡡𑡢𑡣𑡤𑡥𑡦𑡧𑡨𑡩𑡪𑡫𑡬𑡭𑡮𑡯𑡰𑡱𑡲𑡳𑡴𑡵𑡶𑡷𑡸𑡹𑡺𑡻𑡼𑡽𑡾𑡿𑢀𑢁𑢂𑢃𑢄𑢅𑢆𑢇𑢈𑢉𑢊𑢋𑢌𑢍𑢎𑢏𑢐𑢑𑢒𑢓𑢔𑢕𑢖𑢗𑢘𑢙𑢚𑢛𑢜𑢝𑢞𑢟𑢠𑢡𑢢𑢣𑢤𑢥𑢦𑢧𑢨𑢩𑢪𑢫𑢬𑢭𑢮𑢯𑢰𑢱𑢲𑢳𑢴𑢵𑢶𑢷𑢸𑢹𑢺𑢻𑢼𑢽𑢾𑢿𑣀𑣁𑣂𑣃𑣄𑣅𑣆𑣇𑣈𑣉𑣊𑣋𑣌𑣍𑣎𑣏𑣐𑣑𑣒𑣓𑣔𑣕𑣖𑣗𑣘𑣙𑣚𑣛𑣜𑣝𑣞𑣟𑣠𑣡𑣢𑣣𑣤𑣥𑣦𑣧𑣨𑣩𑣪𑣫𑣬𑣭𑣮𑣯𑣰𑣱𑣲𑣳𑣴𑣵𑣶𑣷𑣸𑣹𑣺𑣻𑣼𑣽𑣾𑣿𑤀𑤁𑤂𑤃𑤄𑤅𑤆𑤇𑤈𑤉𑤊𑤋𑤌𑤍𑤎𑤏𑤐𑤑𑤒𑤓𑤔𑤕𑤖𑤗𑤘𑤙𑤚𑤛𑤜𑤝𑤞𑤟𑤠𑤡𑤢𑤣𑤤𑤥𑤦𑤧𑤨𑤩𑤪𑤫𑤬𑤭𑤮𑤯𑤰𑤱𑤲𑤳𑤴𑤵𑤶𑤷𑤸𑤹𑤺𑤻𑤼𑤽𑤾𑤿𑥀𑥁𑥂𑥃𑥄𑥅𑥆𑥇𑥈𑥉𑥊𑥋𑥌𑥍𑥎𑥏𑥐𑥑𑥒𑥓𑥔𑥕𑥖𑥗𑥘𑥙𑥚𑥛𑥜𑥝𑥞𑥟𑥠𑥡𑥢𑥣𑥤𑥥𑥦𑥧𑥨𑥩𑥪𑥫𑥬𑥭𑥮𑥯𑥰𑥱𑥲𑥳𑥴𑥵𑥶𑥷𑥸𑥹𑥺𑥻𑥼𑥽𑥾𑥿𑦀𑦁𑦂𑦃𑦄𑦅𑦆𑦇

卷八の最後の 2 行の西夏文は、

「普賢等ノ諸菩薩ト舍利子等ノ諸ノ声聞ト及ビ諸天・龍・人・非人等ノ一切ノ大会ハ皆大ニ歡喜シ、仏ノ語ヲ受持シテ敬礼シテ去レリ」とあり、妙法蓮華經第八と尾題がつき、その後に2行にわたる「恭聞」がついている。

「一心玄妙法界ヲ圍撰シ無余ノ諸仏ノ知見、有情皆ニ普クシテ遺サズ終ル。乗ハ悟リ難キモ宜シキニ随イ方便ヲ設立シ籍リテ和シ実ニ入ル三円七喻・・・・」

羅福成は上掲書の中で、モリスの著作から巻一の8行（録毛氏蔵本）と羽田

亨博士から贈られた写真卷七の55行の西夏文を録文し（録東洋学院蔵本）、それには両方共に「姚秦三蔵法師鳩摩羅什 漢訳 今上皇帝 詔ヲ奉シ再ビ校正ス（奉詔再校正）」と明記されているにも拘らず、不思議なことに、その録文に該当する個所として、隋三蔵崛多笈多三法師 添品妙法蓮華經第一と第七（宋大蔵本より）を挙げて、西夏文に考釈を施した。考釈の最後を次のように結んでいる。

「按ズルニ、此ノ經ハ常不輕菩薩品ヨリ始マリ、妙音菩薩品ニ至リテ終ル。^{オモ}為ウニ第七卷ハ正ニ宋本添品法華經ト同ジナリ。原本ハ今安南河内東洋学院ニ蔵サル。又、此ヲ以テ、毛氏所蔵ノ序品ト校スルニ、行款、格式、書法、一ニシテ^{アワ}符ザルハナシ。東土ノ伝本頗ル少ナキニヨリ、今将ニ以上ノ二種ヲ玻璃板影印ヲ用イテ書後ニ付シ、並ベテ参考ニ資セントス」

羅福成の録文第七卷を鳩摩羅什訳と照合すると、よく合致する。ただし卷七の常不輕品第二十の一部（『大正新脩大蔵經』 pp. 128-130とpp. 142-146）と妙音菩薩品第二十四の一部（『大正新脩大蔵經』 pp. 236-238最後）に当たる部分が連書されている。また当時ベトナム河内にあった極東学院に西夏文が保管されていたという情報も伝わっていない。（モリス旧蔵本が一時極東学院にあり、後にギメ博物館に移された可能性は考え得る。）いずれにせよ現在の知識では『添品妙法蓮華經』の西夏語訳は現存していないと言わざるを得ない。

II コズロフ収集本

ロシア東方学研究所サンクト・ペテルブルク支所に所蔵されるいわゆるコズロフ収集本の中には、1999年に刊行されたクチャーノフの『西夏語仏教典籍目録』によると、整理された法華經の写本刊本はかなりの数量にのぼる。それ以外に未整理の断片の中にも法華經の残卷が含まれている可能性がなお残っている。まず先般公刊した『西夏文妙法蓮華經』に含まれるテキストの内容を明示しておきたい。

西夏文法華經 Cat. 218

発掘番号	卷数	内容
6253	序	写本 序と序品第一。35行残。 ⁷⁾
787 ^{*6)}	序	刊本 序10行残、卷三化城喻品第七の一部を含む。

2436	卷一	刊本	序品第一 (完)、方便品第二 (尾欠)。卷七藥王菩薩本事品第二十三 (10行残)。
4562*	卷二	刊本	經題と尊号 3 行、譬喻品第三頭初から 5 行残。
805	卷二	刊本	譬喻品第三 (頭欠)、信解品第四 (尾欠)。
3900*	卷三	刊本	經題と尊号 3 行、藥草喻品第五頭初から 5 行残。
7231*	卷三	刊本	化城喻品第七10行残。頭尾欠。787の後の部分より。
2317	卷四	刊本	五百弟子受記品第八 (完)、授学無学人記品第九 (完)法師品第十 (完)、見宝塔品第十一 (尾欠)。
67	卷五	刊本	提婆達多品第十二 (完)、勸持品第十三 (完)、安樂行品第十四 (完)、從地涌出品第十五 (完)
719	卷六	写本	如来寿量品第十六 (完)、分別功德品第十七 (完)、隨喜功德品第十八 (完)、法師功德品第十九 (完)
782	第六	刊本	如来寿量品第十六 (完)、分別功德品第十七 (完)、隨喜功德品第十八 (完)、法師功德品第十九 (尾欠)。
4674*	卷六	刊本	法師功德品第十九、最後の 7 行残。
6452 b	卷七	刊本	常不輕菩薩品第二十(頭欠)、如来神力品第二十一(完)、囑累品第二十二 (完)、藥王菩薩本事品第二十三 (完)、妙音菩薩品第二十四 (尾欠)。
6452 g	卷七	刊本	藥王菩薩本事品第二十三 (8 行残) から妙音菩薩品第二十四の冒頭まで (12行残)。
6452 g	卷八	刊本	觀世音菩薩普門品第二十五(頭欠)、陀羅尼品第二十六(完)、妙莊嚴王本事品第二十七(完)、普賢菩薩勸發品第二十八(尾欠)。

サントクト・ペテルブルク東方学研究所の畏友ソローニン氏 (K.T. Solonin) は “A brief note on the Tangut Translation of 妙法蓮華經 preserved in St. Petersburg Institute for Oriental Studies” (MS未発表) の中で、コズロフ収集本法華經全体を次のように 6 種に分けている。

(Tang. 218)

1. Old edition (八卷本) 一折 5 行、一行17字詰

- 2. Old edition（八巻本） 一折7行、一行16字詰
- 3. New edition（八巻本） 一折5行、一行16字詰
- 4. New edition（八巻本） 一折6行、一行16字詰
- 5. 写本 折本 一折5行、一行17字

(Tang. 219)

- 6. 普門品の断片 多数

上掲リストと照合すると、次のようになる。

1. Old edition type I（八巻本）

- 1. 3900 折本
 - a. 卷三薬草喻品（第五完本としているが、実際は8行残）
 - b. 見宝塔品第十一（10行）
 - c.1）陀羅尼品第二十六（9行）、2）妙莊嚴王本事品第二十七
 - d. 不詳（5行）
 - e. c.2）と同じ（10行）

2. Old edition type II（上掲リストにはない）

- 2. 6723 序（？）（4折）
- 3. 7966 1）従地涌出品第十五（3折）、2）譬喻品第三（1折）

3. New edition type I 折本

- 4. 6452 上掲リストにはない。
 - a. 分別功德品第十七（26折）
 - b.1）常不軽菩薩品第二十（107行）、2）如来神力品第二十一（完）
 - 3）嘱累品第二十二（完）、4）薬王菩薩本事品第二十三（完）、
 - 5）妙音菩薩品第二十四（131行、110折）
- 5. 6452 c.1）觀世音菩薩普門品第二十五（108行）、2）陀羅尼品第二十六（完）、
- 3）妙莊嚴王本事品第二十七（完）、
- 4）普賢菩薩勸発品第二十八（105行、85折）
- 6. 927 上掲リストにはない。
 - 1）安樂行品第十四（20行）、2）従地涌出品第十五（61行12折）

7. 67 上掲リストと同じ巻五。
1) 提婆達多品第十二(115行)、2) 勸持品第十三(完)、
3) 安樂行品第十四(完)、4) 從地涌出品第十五(完)
8. 4674 上掲リストと同じ巻六。
法師功德品(6行1折)(実際は7行残。筆者)
9. 782 上掲リストにあり。
1) 如來壽量品第十六(完)、2) 分別功德品第十七(完)、
3) 隨喜功德品第十八(完)、4) 法師功德品第十九(205行)
10. 4631 上掲リストにはない。
1) 序(大正藏經と異なる)、序品第一(10行)、2) 序品第一^{*}(3行)
11. 6723 上掲リストにはない。
序品第一(9折)
12. 4562 上掲リストと同じ、巻二。
譬喻品第三(4折)
13. 4011 上掲リストにはない。
序品第一(16折)
14. 66 上掲リストにはない。
方便品第二(27行)
15. 7231 上掲リストにあり。
化城喻品第七(4折)
16. 6310 上掲リストにはない。
信解品第四(8折)
17. 2317 上掲リストにあり。巻四。
1) 五百弟子受記品第八(完)、2) 授學無學人記品第九(完)、
3) 法師品第十(完)、4) 見寶塔品第十一(91折)
18. 2436 上掲リストにあり。巻一。ただし3)の分量は異なる。
1) 序品第一(完)、2) 方便品第二(160行)、
3) 藥王菩薩本事品第二十三(30行91折)
19. No. ? 上掲リストにはない。
譬喻品第三(偈文)(19折)

4. New edition type II 折本

20. 7350 上掲リストにはない。
1) 化城喻品第七(20折)、2) 観世音菩薩普門品第二十五(6折)、
3) 信解品第四(6折)、4) 藥王菩薩本事品第二十三(5折)、
5) 4)と同じ(1折)
21. 6621 上掲リストにはない。
1) 化城喻品第七(3折)、2) 法師功德品第十九(2折)、
3) 1)と同じ(4折)、4) 序(4折)、5) 3)及び1)と同じ(3折)、
6) 1) 3) 5)と同じ(1折)、7) 方便品第二(偈文2折)
22. 6310 上掲リストにはない。
1) 譬喻品第三(16折)、2) 信解品第四(6折)、3) 不詳、
4) 授記品第六(2折)、5) 観世音菩薩普門品第二十五(4折)、
6) 3)と同じ(7折) 7) 授学無学人記品第九(2折)
23. 6723 上掲リストにはない。
1) 信解品第四(6折)、2) 見宝塔品第十一(5折)、
3) 不詳(偈文2折)、4) 如来寿量品第十六(3折)、
5) 不詳(経讚文2折)
24. 2665 上掲リストにはない。不詳(西夏文序)(3折)
25. 2264 1) 序(完)西夏語訳の紀年を含む重要な序、
2) 化城喻品第七(2折)
26. 7178 上掲リストにはない。
観世音菩薩普門品第二十五(7折)
27. 7791 上掲リストにはない。
1) 妙音菩薩品第二十四(4折)、2) 不詳(偈文)
28. 7726 上掲リストにはない。不詳
29. 7323 上掲リストにはない。
見宝塔品第十一(2折)
30. 7762 上掲リストにはない。
1) 観世音菩薩普門品第二十五(完)、2) 陀羅尼品第二十六(完)、
3) 妙莊嚴王本事品第二十七(完)、4) 普賢菩薩勸発品第二十八、

5) 西夏文後序 仏名讃及木版図画 (完、91折)

31. 580 上掲リストにはない。

1) 授学無学人記品第九 (5折)、2) 法師品第十 (5折)

32. 805 上掲リストと同じ巻二。

1) 譬喩品第三、2) 信解品第四 (33折)

33. 692 上掲リストにはない。

譬喩品第三 (16折)

34. 583 上掲リストにはない。

序品第一 (7折)

35. 7467 上掲リストにはない。

1) 五百弟子受記品第八、2) 授学無学人記品第九 (完)、
3) 法師品第十 (完)、4) 見宝塔品第十一 (75折)

5. 写本 折本 一折5行 一行17字

36. 6253 1) 2) は上掲リストと同じ

1) 序品第一 (1折)、2) 序 (完)、

3) 妙音菩薩品第二十四 (5折)、

4) 普賢菩薩勸発品第二十八 (2折)

37. 64 上掲リストにはない。巻四。

1) 五百弟子受記品第八 (完)、2) 授学無学人記品第九 (完)、
3) 法師品第十 (50行42折)

38. 719 上掲リストと同じ。巻六。

寿量品第十六から法師功德品第十九に至る巻六 (完、88折)

39. 68 上掲リストにはない。

常不輕菩薩品第二十から妙音菩薩品第二十四に
至る巻七 (75行、65折)

40. 63 上掲リストにはない。

1) 法師品第七 (56行)、2) 見宝塔品第十一 (完)

41. 65 上掲リストにはない。

勸持品第十三 (2折) やや型が異なる写本。

42. 5838 上掲リストにはない。
薬草喻品第五（2折）
43. 3259 上掲リストにはない。
化城喻品第七（16折）

6. 観世音菩薩普門品第二十五の別行本（上掲リストにはない）⁸⁾
(Tang. 219)

44. 586 木版図画本 折本 一折20行 一行10字（4折）
45. 221 586と同じ（15折）
46. 757 無画本 一折5行 一行12字（10折）
47. 758 同（4折）
48. 760 同（2折）

以上、ソローニンは総計48点をリストに載せている。ソローニンの Old edition と New editoin の分類が適切であるか否か、現在筆者はそれらのテキストの実物或いはそのコピーを手にするできないためにその可否についての意見は避けざるを得ない。

クチャーノフは1999年の上掲目録ではそのような基準を明示しなかった。法華経全体を簡潔に次のように分類している。

- | | | |
|-----------|------------|---------------|
| Tang. 218 | No. 78 | 写本類 |
| | No. 79, 80 | 刊本類 |
| Tang. 430 | No. 81 | 妙法蓮華心経（写本）冊子装 |
| Tang. 219 | No. 82 | 普門品別行本（無画本） |
| | No. 83 | 普門品別行本（画入本） |

この分類自体は上掲のソローニンの分類と大差はないが、各類に入れている経典番号にはかなり大きい出入りがある。

クチャーノフ分類を基にして、上掲のソローニンの分類番号を挙げておく（小円中の数字は巻数を示す）。

クチャーノフ分類	発掘番号	ソローニン分類番号
No. 78 写本類	6253①	36 ^{1) 2)}
	5838③	42
	3259③	43
	64④	37
	63④	40
	719⑥	38
	68⑦	39
	6253⑦⑧	36 ^{3) 4)}

ソローニン41 No. 65 勸持品第十三(2折)は、クチャーノフのリストにはない。クチャーノフのリストでは小断片は省略しているためであろうか。以下も同様である。

クチャーノフ分類	発掘番号	ソローニン分類番号	発掘番号	ソローニン分類番号
No. 79 刊本・折本	2436①	18	66①	14
	564①	なし	4631①	10
	4011①	13	6723①	2, 11, 23
	4562②	12	7231③	なし
	3900③	1	2317④	17
	6452④	なし	67⑤	7
	927⑤	6	782⑥	9
	4674⑥	8	3901⑥	なし
	4502⑦	なし	6452⑦	4, 5
	7231⑧	15		
No. 80	692②	33	805②	32

そのほか上掲ソローニンが挙げる次の番号がクチャーノフ分類には入っていない。発掘番号の後に挙げたのは、ソローニンの分類番号である。

7966-3、6310-16、7350-20、6621-21、6310-22、2665-24、2264-25、7178-26、7791-27、7726-28、7323-29、7762-30、580-31、583-34、7467-35、6253-36

No. 82 普門品別行本（無画本）

574、575、576 ソローニンの分類にはない

757-46、758-47、760-48

No. 83 普門品別行本（画入本）

221-45、586-44、940-ない

最後に挙げた画入本「観世音菩薩普門品」単独別行品（木版折本）は、『法華経とシルクロード』展の出品図録中、28-2に収められる。経典の上部全体にわたって、図によって解説した珍しいテキストであるが、よく普及したらしく、全く同種類のものが1958年に敦煌莫高窟宕泉河東岸のストゥーパの中から発見された。現在、敦煌文物研究所に保管されている（『敦煌研究』1985、3期に紹介されている）。

Tang. 430とする妙法蓮華心経（発掘番号4072）は、冊子装 7 × 5 cmの小型写本で全体は27頁あり、一頁3行一行7字詰である。

Ⅲ スタイン収集本

英国図書館（The British Library）に所蔵されるスタイン収集西夏文には上掲コズロフ収集本中、Tang. 430とする「妙法蓮華心経」に当たる写本（卷子本）の残片があるのみで、ほかにまとまった形の法華経はない。

BM No. 3862「妙法蓮華経心」17行残 cf. 西田龍雄『西夏文華嚴経Ⅲ』p. 46

Ⅳ 北京図書館本

筆者は以前、北京図書館（国家図書館）には卷一、卷四、卷七（写本）、卷二、卷三（刊本）が所蔵されていると紹介した。これはグリンステッド（Grinstead）の『西夏大藏経』に基いて書いたものであるが、その所在を誤認していた。これらの写本類は実際はコズロフ収集本であったと考えられる。北京図書館には、曾て周淑迦が紹介し、今は史金波が挙げているごとく、卷二（刊本）のみが所蔵されるところなのが正しいのであろう。しかし、何故か史金波も添品妙法蓮華経卷第二としている。（『西夏仏教史略』p. 373）

中国で1974年に、甘肅省武威の下西沟峴から出土した発掘品の中に蝴蝶装

の妙法蓮花經があると報告されているが(『考古』1974. 3期)⁹⁾、その詳しいことは公表されていない。上述のように現存本はいずれも折本(BMのみは卷子本残片)であり、蝴蝶装は珍しい。

3 諸本の校勘の試み

西夏語仏典の研究にとって、まず肝要なことは、テキスト間の校勘作業であることは言うまでもない。しかし残念ながら、ほとんどのテキストが全面的に公開されていない現状では、その作業は一部の範囲に限定されてしまうのは止むを得ない。

『法華經』に関して言えば、著者はとくにコズロフ収集本中の写本と刊本(木活字本)の照合と、コズロフ収集本とパリとベルリンにあるモリス旧蔵本を中心とする八巻本(以下モリス本と呼んでおく)との校勘が最も必要であることを強調しておきたい。

それらの作業が大きい成果をもたらすであろうことは明白であるが、ここでは次の2つの校勘を行うのみで満足せざるを得ないのである。

1. モリス公開テキスト＝羅福成が録文したテキスト(序品の初めの部分)とコズロフ収集本との校勘

2. 筆者が曾てパリのギメ博物館において書き写した陀羅尼品の陀羅尼とコズロフ本との校勘

次にこの2つの作業を順次、試みてみよう。

I 序品冒頭部分の校勘¹⁰⁾

1 コズロフ本とモリス本の異同

コズロフ本の方が古く、モリス本は後代それを改めたものと考えられるので、以下、コズロフ本を基にしてその異同を示すことにする(下線の部分に異同がある)。

コズロフ本	モリス本	漢訳本	異同の内容 ¹¹⁾
1 <u>𑖦𑖩𑖪</u>	<u>𑖦𑖩𑖪</u>	其(代名詞)	平声:上声 上声が正しい
thafi(平20)	tha fi(上17)		

2 𪛗𪛗𪛗𪛗	——𪛗	阿若憍陳如
ʔa ˈdʒi̯a ₂ kīəw tʃhīɔn ńz̥i̯u	ž̥i̯u	ńz̥- : ž̥-
(?)(上16) (平45) (平16) (平2)	(上2)	平声 : 上声
3 𪛗𪛗𪛗𪛗	𪛗——	摩訶迦葉
mɔh xah kah š̥i̯a	maɪ ɲa	-ɔh : -ah
(上42)(上14) (平20)(平19)	(上14)(上56)	x- : ɲ-
4 𪛗𪛗𪛗𪛗	𪛗——	優樓頻螺迦葉
ʔyīəw ləw phīɔn lɔh	ʔyīəw	上声 : 平声
(上40) (平43) (平16) (平49)	(平45)	
5 𪛗𪛗𪛗𪛗	——𪛗——	伽耶迦葉
khah ʔyīan	ʔyah	-ian : -ah
(平17) (平26)	(上17)	
6 𪛗𪛗𪛗𪛗	——𪛗——	大目犍連 (大は意識する)
大 mbɔ khīan li̯en	mbɔw	-ɔ : -ɔw
(平5)(上24)(平42)	(上45)	
7 𪛗𪛗𪛗𪛗	𪛗——𪛗𪛗	摩訶迦旃延
mɔh xah kah tʃi̯a ʔyīan	maɪ ɲa tʃi̯a ʔyīan	(上掲3と同じ)
(上42)(上14) (平20) (平19) (平26)	(上14)(上56)(平19)(上24)	平声 : 上声
8 𪛗𪛗𪛗𪛗	——𪛗——	阿菴樓駄
ʔa ndəw ləw thon	thīew	nd- : th-
(?)(平43) (平43) (平54)	(上41)	-əw : -īəw
9 𪛗𪛗𪛗𪛗	𪛗——	劫賓那
劫 pīɔn nɔh	kah	意識 : kah
(平16) (平49)	(平20)	
10 𪛗𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗——	離婆多
li phɔh ton	li phɔh	liは上声 : 平声
(上9) (平49) (平54)	(平10) (平49)	phɔhは同音異字
11 𪛗𪛗𪛗𪛗	——𪛗𪛗	畢陵伽婆蹉
pīɔn li̯en kah phɔh son	phɔh son	phɔhとsonは共に同音異字
(平16)(平42)(平20)(平49)(平54)	(平49)(平54)	

12 𪛗𪛗𪛗	— 𪛗 —	薄拘羅	
phu kǐəw lɔh	kǐəw		kǐəwは同音異字
(平1)(平45)(平49)	(平45)		
13 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗— 𪛗	摩訶拘絺羅	tš- : tšh-
mɔh xah kǐəw tši lɔh	maɪ ɲa tshi		mɔh xah :
(平45)(上9)(平49)	(平14)(上56)(上9)		maɪ ɲaは上掲3と同じ
14 𪛗𪛗𪛗	𪛗 —	孫陀羅	
swən thon lɔh	swən		swənは同音異字
(平15)(平54)(平49)	(平15)		
15 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗	— 𪛗 —	富楼那彌多羅尼子	tɔh : ton
xu ləw nɔh miɪ tɔh lɔh ɲi	子		子は意識
(平1)(平43)(平49)(平11)(上42)(平49)(平10)	(平15)		
16 𪛗𪛗𪛗	𪛗𪛗𪛗	須菩提	
sǐuɪ phu thiɪ	sǐuɪ phɔh tʃen ₂		sǐuɪは同音異字
(上3)(平1)(平11)	(平3)(平49)		phɔh tʃen ₂ は菩提の訳語として定着
17 𪛗𪛗𪛗𪛗	— 𪛗 —	耶輸陀羅	šǐu : šǐɔh
ʔyah šǐu thon lɔh	šǐɔh		平声2韻：平声7韻
(上17)(平2)(平54)(平49)	(平7)		
18 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗	— 𪛗𪛗 —	菩薩摩訶薩	
phɔh tsah mɔh ɲah tsah	maɪ ɲa		mɔh : maɪ
(平49)(平17)(上42)(上14)(平17)	(上14)(上56)		ɲah : ɲa
19 𪛗𪛗𪛗𪛗	— 𪛗 —	阿耨多羅	
ʔa nɔ tɔh lɔh	ton		tɔh : ton
(?)(上5)(上42)(平49)	(平54)		

このほか両テキストの間に異同のない例も多数ある。たとえば𪛗𪛗𪛗𪛗 nɔh thiɪ kah šǐa 那提迦葉、𪛗𪛗𪛗𪛗 kǐəw xʷən phɔh thiɪ 僑梵波提、𪛗𪛗 ʔa naɪ 阿難、𪛗𪛗 lɔh xəw lɔh 羅睺羅などである。これらの声聞名などの訳名は鳩摩羅什訳の漢字音写を基に西夏語に置き換えられたものであって、もとの梵語とは直接に対応しない。

上に挙げたコズロフ本とモリス本の間に見られる相違がなぜ出現したのか。同音異字である場合、問題は少ないが、そして平声字と上声字の違いも大きい問題がないと考えられるが、その他は、西夏語自体の変化とか訳者の基盤となった言葉の違いに由来する可能性が考えられる。如と $\acute{n}z\ddot{u} : \check{z}u$ 、多と $t\phi h : ton$ 、菩と $phu : ph\phi h$ 、目と $mb\ddot{u} : mbow$ 、耶と $?y\ddot{a}n : ?y\phi h$ 、そして摩訶に対する音写字の違いは目立っている。耶輸陀羅の輸に対する $\check{s}iu$ (平2) と $\check{s}i\phi h$ (平7) のような近似音は、後代、西夏語で両韻が統合した状況を反映していると見たい。 $nd\ddot{e}w$ (上41) と $ndaw$ (平43) も同様であろう。また須菩提に対するコズロフ本須 𐰽 $\check{s}i\phi h$ が‘薬’の意味で、あとの提 𐰽 が‘飲む’を意味するのは洒落ている。

2 漢字音写と西夏字音写との対応

モリスは20世紀の初めに、梵語音と対照して西夏文字の読み方を推定しようとしたが、現在では西夏語音は韻書に記載された反切という確実な根拠から再構できる段階に到達している。

この両テキスト間の異同は、また漢字音と西夏音の置き換えが規則的に行われているかどうかという面からも当然考察しなければならない。

ここでは極く限定した範囲に止まる(序品第一の始めの部分)が、漢字音と西夏字音の大まかな対応関係を一応考察してみよう。(K=コズロフ本、M=モリス本)

韻類	漢字音写	西夏文字による音写
1 支	離 来支	K 𐰽 li (上9) = M 𐰽 li (平10)
	彌 明支	KM 𐰽 $mi\phi h$ (平11)
2 脂	尼 泥脂	KM 𐰽 ηi (平10)
	絺 徹脂	K 𐰽 $t\check{s}i$ (上9) $\neq$ M 𐰽 $t\check{s}hi$ (上9)
	利 来至	KM 𐰽 rir (上72)
3 齊	提 定齊	K 𐰽 $thi\phi h$ (平11) $\neq$ M 𐰽 $t\check{i}en$ (平42)
4 魚	如 日魚	K 𐰽 $\acute{n}z\ddot{u}$ (平2) $\neq$ M 𐰽 $\check{z}u$ (上2)
5 虞	拘 見虞	K 𐰽 $k\check{i}ow$ (平95) $\neq$ M 𐰽 $k\check{i}\phi h$ (平3)
	須 心虞	K 𐰽 $s\check{i}\phi h$ (上3) = M 𐰽 $s\check{i}\phi h$ (上3)
6 模	菩 並模	K 𐰽 phu (平1) $\neq$ M 𐰽 $ph\phi h$ (平49)

7	真	頻	並真	^{KM} 禪	phĩən (平16)
		賓	幫真	^{KM} 禪	pĩən (平16)
		陳	澄真	^{KM} 禪	tshĩən (平16)
8	魂	孫	心魂	^K 𪛗	swən (平15) = ^M 𪛗 swən (平15)
9	阮	鍵	群阮	^{KM} 羈	khĩan (上24)
10	寒	難	泥寒	^{KM} 禪	naɦ (平17)
11	仙	延	余仙	^K 𪛗	?yĩan (平26) = ^M 𪛗 ?yĩan (上24)
		連	來仙	^{KM} 禪	liən (平42)
		旃	章仙	^K 𪛗	tšĩa (平19) = ^M 𪛗 tšĩa (平19)
12	宵	僑	見宵	^{KM} 羈	kĩəw (平45)
13	歌	訶	曉歌	^K 𪛗	xaɦ (上14)、 ^K 𪛗 ɲaɦ (上14) ≠ ^M 𪛗 ɲa (上56)
		羅	來歌	^{KM} 禪	lɔɦ (平49)
		多	端歌	^K 𪛗	tɔɦ (上42) ≠ ^M 𪛗 ton (平54)
		駄	定歌	^{KM} 𪛗	thɔɦ (平49)
		陀	定箇	^{KM} 𪛗	thɔɦ (平49)
		那	泥箇	^{KM} 𪛗	nɔɦ (平49)
14	戈	摩	明戈	^K 𪛗	mɔɦ (上42) ≠ ^M 𪛗 maɦ (上14)
		婆	並戈	^K 𪛗	phɔɦ (平49) = ^M 𪛗 phɔɦ (平49)
15	麻	伽	群麻	^K 𪛗	khah (上17) ^{KM} 𪛗 kah (平20)
		迦	見麻	^{KM} 𪛗	kah (平20)
		耶	余麻	^K 𪛗	?yĩan (平26) ≠ ^M 𪛗 ?yah (上17)
16	蒸	陵	來蒸	^{KM} 禪	liən (平42)
17	尤	富	幫宥	^{KM} 羈	xu (平1)
		優	影尤	^K 𪛗	?yĩəw (平45) = ^M 𪛗 ?yĩəw (上40)
18	侯	樓	來侯	^{KM} 羈	ləw (平43)
		眸	匣侯	^{KM} 𪛗	xəw (平43)
		冤	泥侯	^K 𪛗	ndəw (平43) ≠ ^M 𪛗 ndĩəw (上41)
19	凡	梵	並梵	^{KM} 𪛗	x ^w an (上25)
20	屋	目	明屋	^K 𪛗	mbɔ (平5) ≠ ^M 𪛗 mbɔw (上45)
21	鐸	薄	並鐸	^{KM} 𪛗	phu (平1)

- 22 藥 若 日藥 ^{KM}𐰚 ^ʰdžīa₂ (上16)
 23 葉 葉 書葉 ^{KM}𐰚 šīa (平19)
 劫 見葉 ^M𐰚 kaḥ (平20)

<『広韻』では、葉に與涉切と式涉切がある。西夏語音はあとの反切に当てている>
 以上の対応関係を総合すると、次のようになる。

- 1 支脂 -i, -ih 齊 -ih
 2 歌戈 -aḥ, -ɔḥ, -on 麻 -aḥ 寒 -aḥ 凡 -^wan
 藥葉 -īa, -aḥ 阮 īan 仙 -īan, -īa, -īen 蒸 -īen
 3 模 -u (-ɔḥ) 屋 -ɔ (-ɔw) 鐸 -u
 魚虞 -īu, -īuḥ
 4 侯 -əw 尤 -īəw 宵 -īəw
 真 -īən 魂 -^wən

そして上掲例から分かるように、声母の対応原則は次のようにまとめることができる。

- 1 漢語の無声無気音には、西夏語の無声無気音が当てられた。
 幫母：p- (x-), 見母：k-, 端母：t-, 章母：tš-
 2 漢語の無声出気音には、西夏語の無声出気音が当てられた。
 徹母：tšh- (tš-)
 3 漢語の有声閉鎖・破擦音には、西夏語の無声出気音が当てられた。
 並母：ph- (x^w-), 定母：th- (t-), 群母：kh- (k-), 澄母：tšh-
 4 漢語の鼻音は、西夏語の鼻音もしくは前出鼻音を伴う有声閉鎖音が当てられた。
 明母：m-, mb-, 泥母：ṇ-, n-, nd-
 5 そのほか、摩擦音、流音などは、次の対応を示している。
 心母：s-, 書母：š-, 曉母：x- (ṇ-), 匣母：x-,
 喻母：ʔy-, 影母：ʔ-, 日母：ńž-, 𐰚ž-, 来母：l-

II 陀羅尼品に見られる陀羅尼音写の考察

次に、まず陀羅尼品第二十六にある藥王菩薩の陀羅尼の音写を、各句ごとに

コズロフ本とモリス本を対照して掲げる。この対照から両テキストの音写法はかなり異なっているものの、ある程度の規則性をもった対応を示していることが分かる。モリス本の音写法は、西夏語自体の音変化を反映するとともに、梵語音を参照して（おそらく藏人僧侶の読音を介して）それに近づけようとし、その上、音写方法自体に工夫を加えて書き改めたものと考え得るのである。

(K) = コズロフ本、(M) = モリス本¹²⁾

- 1 安 (影寒) 爾 (日紙) skt. anye
 (K) 𐰇𐰆𐰏 ʔan (平24) ži (平10)
 (M) 𐰇𐰆𐰏 ʔa (?) neḥ (上33)
- 2 曼 (明願) 爾 skt. manye
 (K) 𐰇𐰆𐰏 mban (平24) ži (平10)
 (M) 𐰇𐰆𐰏 maḥ (平20) neḥ (上33)
- 3 摩 (明戈) 禰 (泥薺) skt. mane
 (K) 𐰇𐰆𐰏 mōḥ (上42) niḥ (上10)
 (M) 𐰇𐰆𐰏 maḥ neḥ
- 4 摩摩禰 skt. mamane
 (K) 𐰇𐰆𐰏 mōḥ mōḥ niḥ
 (M) 𐰇𐰆𐰏 maḥ maḥ neḥ
- 5 旨 (章旨) 隸 (来薺) skt. citte
 (K) 𐰇𐰆𐰏 tši (上9) li (上9)
 (M) 𐰇𐰆𐰏 tsiḥ (上10) teḥ (上33)
- 6 遮 (章麻) 梨 (来脂) 第 (定霽) skt. carite
 (K) 𐰇𐰆𐰏 tšia (平19) li (上9) thiḥ (上10)
 (M) 𐰇𐰆𐰏 tsaḥ (平20) rir (平79) teḥ (上33)
- 7 除 (書麻) 咩¹³⁾ (?) (羊鳴音) skt. śame
 (K) 𐰇𐰆𐰏 šia (平19) maḥ (平20)
 (M) 𐰇𐰆𐰏 šia (平19) meḥ (平36)

- 8 除履罔雉反(明・旨) 多(端歌) 瑋(云尾) skt. śamitāvi
 (K) 𪛗𪛗𪛗𪛗 šīa li ton (平54) v^w I (平8)
 (M) 𪛗𪛗𪛗𪛗 šīa miñ (平11) tañ (平20) 長 mbiñ (上10)
- 9 羶輸千反(書・先) 帝(端霽) skt. śānte
 (K) 𪛗𪛗 šīan (平26) tiñ (上10)
 (M) 𪛗𪛗𪛗𪛗 šīa (平19) ni (上28) 長 teñ (上33)
- 10 目(明屋) 帝(端霽) skt. mukte
 (K) 𪛗𪛗 mbow (上45) tiñ (上10)
 (M) 𪛗𪛗𪛗 muñ (上4) ki (平30) teñ (上33)
- 11 目多履(來旨) skt. muktatame
 (K) 𪛗𪛗𪛗 mbow ton li
 (M) 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 muñ ki tañ 長 ti (平30) meñ (平36)
- 12 沙(山麻) 履 skt. same
 (K) 𪛗𪛗 soñ (上42) li (上9)
 (M) 𪛗𪛗 sañ (平20) meñ (上33)
- 13 阿(影歌) 瑋沙履 skt. aṣame
 (K) 𪛗𪛗𪛗 a (?) v^w I soñ li
 (M) 𪛗𪛗𪛗 a (?) mbiñ (上10) šīa meñ
- 14 桑(心唐) 履 skt. sama
 (K) 𪛗𪛗 soñ (上42) li (上9)
 (M) 𪛗𪛗 sañ (平20) mañ (平20)
- 15 沙履 skt. same
 (K) 𪛗𪛗 soñ (上42) li (上9)
 (M) 𪛗𪛗 sañ (平20) meñ (上33)
- 16 叉(初麻) 裔(余祭) skt. kṣaye/jaye kṣaye
 (K) 𪛗𪛗 tšha (平18) ʔi (平10)
 (M) 𪛗𪛗𪛗𪛗 ʔdzañ (平20) ʔyañ (上17) khi (平30) šīa ʔeñ (平36)
- 17 阿叉裔 skt. akṣaye
 (K) 𪛗𪛗𪛗 a tšha ʔi
 (M) 𪛗𪛗𪛗 a khi šīa ʔeñ

- 217

- 25 阿亶 (端旱) 哆波 (幫戈) 隸輸 (書虞) 地途賣反 (定・卦)

skt. atyantapāriśuddhi

(K) 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 ʔa tan(平24) tɔh(平49) pɔh(平49) li šīu(平2) šīε₂(上31)

(M) 𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗𪛗 ʔa tyah(上17) ni tah(平20) pah(平20)

rir(平79) šīoh(平7) ndeh(上33)

- 26 漚 (影侯) 究 (見宥) 隸 skt. ukkule

(K) 𪛗𪛗𪛗 ʔəw(平45) kīəw(平45) li(上9)

(M) 𪛗𪛗𪛗 ʔu(?) ku(平1) leh(上33)

- 27 牟 (明尤) 究隸 skt. mukkule

(K) 𪛗𪛗𪛗 mɔh(上42) kīəw li

(M) 𪛗𪛗𪛗 mu(上4) ku leh

- 28 阿羅隸 skt. araḍe

(K) 𪛗𪛗𪛗 ʔa loh li(上9)

(M) 𪛗𪛗𪛗 ʔa rar(平82) ndeh

- 29 波羅隸 skt. paraḍe

(K) 𪛗𪛗𪛗 pɔh(平49) loh li

(M) 𪛗𪛗𪛗 pah(平20) rar ndeh

- 30 首 (書有) 迦差初几反 (初・旨) skt. śukākṣi

(K) 𪛗𪛗𪛗 šīəw(上40) kah(平20) tshi(上9)

(M) 𪛗𪛗𪛗 šīoh(平7) ŋgah(平21) 長 khi ši(平10)

- 31 阿三磨三履 skt. asamasame

(K) 𪛗𪛗𪛗 ʔa san(平24) mɔh san li

(M) 𪛗𪛗𪛗 ʔa sah(平20) mah(平20) sah meh

- 32 佛 (並物) 馱毗吉 (見質) 利秩 (澄質¹⁴) 帝 skt. buddhaviḷokite

(K) 𪛗𪛗𪛗 fwi h(平29) thon(平54) phi h ki li tshi h(平29) ti h(上10)

(M) 𪛗𪛗𪛗 mu(平1) ndah mbih(上10) loh(上42) keh(平36) teh(上33)

- 33 達 (定曷) 磨波利差猜離反 (清・支) 帝 skt. dharmaparīkṣite

(K) 𪛗𪛗𪛗 thah(上14) mɔh(上42) pɔh(平49) li tshi h(平11) ti h(上10)

(M) 𪛗𪛗𪛗 ndah rir mah(平20) pah rir 長 khi ši(平10) teh

- 34 僧 (心登) 伽涅 (泥屑) 瞿 (群虞) 沙禰 skt. saṃghanirghoṣaṇi
 (K) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 sən (平15) khañ ndien(上35) khīuñ (上3) ša niñ
 (M) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 sañ (平20) ŋ^wuñ (平27) ŋgañ (上17)
 rir ŋgɔñ (平49) šīa niñ
- 35 婆舍 (書馬) 婆舍輸地 skt. bhāṣyābhāṣyā śoddhī
 (K) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 pɔñ šīa pɔñ šīa šīē (平9) šīē₂ (上31)
 (M) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 pañ ʔyañ 長 pañ ʔyañ šɔñ (平48) ndañ niñ
- 36 曼哆羅 skt. mantre
 (K) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 mban (平24) thon loñ
 (M) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 mañ ni tir iē
- 37 曼哆羅叉夜多 skt. mantrākṣayate
 (K) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 mban thon loñ tśha ʔyañ ton
 (M) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 mañ ni ti rar khi šīa yañ 長 tēñ
- 38 郵 (云尤) 樓哆 skt. rute
 (K) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 ʔyīəw ləw tɔñ
 (M) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 rīur (上70) tēñ
- 39 郵樓哆僑舍略盧遮反 (來·麻) skt. rutakauśalye
 (K) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 ʔyīəw ləw tɔñ kīəw šīa līañ (上18)
 (M) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 rīur tañ kɔñ (平49) šīa leñ
- 40 惡 (影鐸) 叉邏 skt. akṣaye
 (K) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 ʔañ (平17) tśha loñ
 (M) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 ʔa khi šīa ʔyēñ
- 41 惡叉冶 (余馬) 多冶 skt. akṣayavanatāya
 (K) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 ʔañ (平17) tśha ʔyañ ton ʔyañ
 (M) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 ʔa khi šīa yañ v^wañ (平17) nañ (上17) tañ 長 ʔyañ
- 42 阿婆盧 skt. abalo?
 (K) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 ʔa pɔñ lu (平1)
 (M) 𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦𑖦 ʔa pañ loñ

43 阿摩若荏蔗反(曰・禡)那多夜 skt. amanyanatāya

(K) 𣎵𣎵𣎵𣎵𣎵𣎵 ʔa moɦ ʔdžīa₂ noɦ tonʔ yaɦ

(M) 𣎵𣎵𣎵𣎵𣎵𣎵 ʔa maɦ ni dīa naɦ taɦ 長 ʔyeɦ

上述した声母と韻母の対応は両テキスト間で大まかな点は一致するが、音写の方法自体に根本的な相違がある。それはモリス本が実際には別の漢訳本に基づいたためなのか、或はチベット語訳本の影響を受けた結果かもしれないが、上述のように梵語に近づいた形を示している。

たとえば、達磨(定曷)(明戈)(dharma)の音写はコズロフ本では、𣎵𣎵 thaɦ (上14) moɦ (上42)を使い、漢訳の達磨を置き換えたことは確かである。ところがモリス本では𣎵𣎵𣎵 ndaɦ rir maɦ (平20)のように-r-に当る字を入れていてもとの梵語dharmaに近づけている。西夏語訳禅籍では前者の音写形が常用されている。

また同様に陀羅尼(定歌)(来歌)(泥脂)(dhāraṇi)に対しては、コズロフ本の𣎵𣎵𣎵 thon(平54) loɦ(平49) ɲi(平10)より、モリス本の𣎵𣎵𣎵 ndaɦ (上17) 長 rar(平82) niɦ(上10)の方がより梵語形に近い。

これも一般經典内では前者の形が多く使われているから、初期の訳語(音写語)の中でかなりの範囲に定着していたことを意味する。それ故、モリス本の音写の第一の特徴は、全般的に梵語音に近づけた点にあることを指摘しておきたい。

具体的に述べると、まず第一に陀羅尼の例に見られるように漢字音写で引に当たる𣎵(長くする)を小書して加えて長母音を示した点にある。

第二に、末尾子音-n、-ŋ、-kに対して、西夏文字一字を小さく書き加えて与えている点である。この方法を採用したことは、当時の西夏語には鼻音化母音のみであり、末尾の鼻子音や-p、-t、-kは存在しなかった事実を明確に示している。

漢字音写	コズロフ本	モリス本
𣎵 sān	𣎵 šīan	𣎵𣎵 šīa-ni
𣎵 tyan	𣎵 tan	𣎵𣎵 tyah-ni
便 bhyān	𣎵 phīen ₂	𣎵𣎵 myah-ni

𠵹と𠵹は、いずれも𠵹(上10)と𠵹(平11)に𠵹(上17)を加えた反切合成字である。

漢字音写	コズロフ本	モリス本
曼 man	𠵹 mban	𠵹𠵹 mah-ni
摩若 manya	𠵹𠵹 mōfi ² dzīa ₂	𠵹𠵹𠵹 mah-ni-dīa
僧 sam(gh)	𠵹 sən	𠵹𠵹 safi-ŋ ^w ti(平27)
目 muk	𠵹 mbow	𠵹𠵹 muhki

𠵹、𠵹、𠵹は、それぞれ、-n、-ŋ、-kを代表している。

第三に二重子音に対する音写法を挙げなければならない。

i) kṣ-型

漢字音写では、次の例のようにtšh-またはkh-に当たる漢字1字を使い、コズロフ本ではそれを西夏字1字を以って置き換える形をとるが、モリス本では西夏字2字を使って梵語本来の形を反映させている。

skt.	漢字音写	コズロフ本	モリス本
kṣa	叉	𠵹 tšha	𠵹𠵹 khi-šīa
kṣi	差	𠵹 tšhi	𠵹𠵹 khi-ši
kṣi	耆	𠵹 khifi	𠵹𠵹 khi-ši
kṣi	差	𠵹 tshifi	𠵹𠵹 khi-ši

ii) tr-型

例は少ないが、コズロフ本thōfi-lofiとモリス本tirarの対比が見られる。

skt.	漢字音写	コズロフ本	モリス本
mantra	曼哆羅	𠵹𠵹 mban thon lofi	𠵹𠵹𠵹 mah ni ti rar
			𠵹𠵹𠵹 mah ni ti rię

先に挙げた陀羅尼品の陀羅尼音写における声母の対応関係は、全般にその前に示した原則を出ないが、ただ漢字音写の照系と知系の声母にはモリス本はコズロフ本のtš-、tšfi-とは違い、ts-、tsh-、²dz-が当てられることを特記しておきたい。そして喻母にはコズロフ本のv^w-に対して、モリス本ではmb-が使われている。

韻母の対応は、次のようにまとめることができる。

	コズロフ本	モリス本
1 支	i-	-ih (-eh)
2 脂	i-, ih	-i, -ih, -ir
微	i	-ih
3 齊、祭	-i, -ih	-eh
4 佳	-i	-i
5 虞	-iu	-iʊh
6 模	-u	-ɔh
7 質	-i	-eh
8 物	-i	-u
9 元	-an	-ah, -ahni
10 寒	-an	-ahni
曷	-ah	-ah
11 仙	-ian	-iahi
12 宵	-ɔh, -ou	-ah
13 歌	-ɔh, -ou	-ah
14 戈	-ɔh, -ou	-ah
15 麻	-ɔh, -ia	-ah
16 唐	-ɔh	-ah
鐸	-ah	-ah
17 尤	-ɔh, -iɔw	-u
18 侯	-əw	-u, -iuh, -iur
19 登	-ən	-ahŋ ^w ɬh
20 談	-an	-ah
21 屋	-ɔw	-uhki
22 藥	-iahi	-a
23 葉	-a	-ia

コズロフ本の陀羅尼音写はかなり粗雑なものであったが、その改良形がモリス本に見られ、後の時代、河西時代後期に訳された『金光明最勝王経』や元代の居庸関刻文の音写法に通じていることが分かる。

『金光明最勝王経』には、𑖀𑖦𑖔𑖦 inindi (上28) rar skt. indra、𑖀𑖦𑖔𑖦 mukitefi skt. mukte、𑖀𑖦𑖔𑖦 sūfi ki rir tefi skt. sukṛti、𑖀𑖦𑖔𑖦 khi šā skt. kṣa、𑖀𑖦𑖔𑖦 khi ši skt. kṣi、𑖀𑖦𑖔𑖦 ti rir skt. trirなどの例があり、居庸関刻文にも同じように、𑖀𑖦𑖔𑖦 tafi thaifi 長 ṇgaifi taifi skt. tathāgata、𑖀𑖦𑖔𑖦 naṇṇuṇfi skt. nāṃ、𑖀𑖦𑖔𑖦 safi ṇṇuṇfi skt. saṃ、𑖀𑖦𑖔𑖦 tirīḥ skt. trai、𑖀𑖦𑖔𑖦 tirar skt. tra、𑖀𑖦𑖔𑖦 mun di re skt. mudreなどがあり、-kの使用例はないが、𑖀𑖦𑖔𑖦 naṇmi (平30) skt. naṃや𑖀𑖦𑖔𑖦 šā ti skt. ṣatのような-m、-tの例も見られる。

もちろん他に多種類の經典における音写例を考察しなければならないが、仏教典籍全体の西夏語への訳業の経過の中で、梵語音写法が改良された時期があったように思われる。それは、すぐ後で編纂される甲種本『華夷訳語』や『元朝秘史』において採用される漢字による外国語音写法の進展と明らかに関係するものであろう。

訳経史の一つの問題として別に考えたい。

<注>

- 1) 本稿は、もともと本年3月に刊行された『西夏文妙法蓮華経』（西田龍雄編、2005創価学会刊）の中に含める予定でかなり以前に執筆したものであったが、事情によってこのような形で別個に公表することになった。
- 2) *Contribution préliminaire à l'étude de l'écriture et la langue Si-hia*. Paris, 1904.
- 3) 1960年頃までの西夏語研究の歴史については拙著『西夏語の研究』I 座右宝刊行会1964を見られたい。最近に至るまでの研究の概観については、史金波『西夏学百年回顧』がある。『中国民族研究年鑑2000年巻』民族出版社2001及び『国家図書館学刊2002増刊西夏研究専号』ほぼ同じ内容である。
- 4) モリス旧蔵本とベルトー旧蔵本（それぞれ当初3冊ずつ所有していた）が、フランスのギメ博物館とドイツの国家図書館に収まった経緯および後者の所蔵本が計5冊になった経緯は詳かではない。石浜純太郎は『西夏遺文雑録』（1925）（ネフスキー『西夏文字便覧』の序（大阪東洋学会重細重研究四号1926刊））の中でドイツ国家図書館の所蔵本を1, 3, 4, 5, 7の五巻とするが（p. xiii）、それらはすべてモリスの旧蔵本と考えていたらしい。以下、便宜上、全八巻をモリス旧蔵本とよ

んでおく。各巻の巻首には説法図などがついている。その実体は拙文『西夏語訳法華経について』の追記で述べた（上掲、西田 2005）

- 5) この調査は1970年11月に行った。
- 6) ※印は、単色印刷の部分であることを示す。
- 7) グリンステット編『西夏大蔵経』に法華経巻一（刊本）が数頁含まれる（pp. 1502-1506）。それはコズロフ・収集2436 方便品第二に続く部分である。その末尾の一行は「（不鮮明）・・・・・・印面ヲ雕スル者ハ道順（𐽀𐽁𐽂）和尚□慧□」と読める。
- 8) 別行本「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」の巻首には「水月観音図」がついている。そのカラー写真は上掲『西夏研究専号』の表紙裏にあり、クチャーノフ『西夏仏教典籍目録』の巻末にもその単色図版が付いている（p. 760、1999 京都大学文学部言語学研究室刊）
- 9) 史金波ほか『国内現存出土西夏文献簡明目録』（上掲、西夏研究専号所収p. 222）には、北平図書館、91.添品妙法蓮華経巻第二、刻本、经文共110面、面6行、行16字と記している。その一文によると、中国国内に現存する西夏文法華経はつぎのようになっている（p. 226）。

七 甘肅省博物館蔵品

- (一) 天梯山石窟発現 1. 妙法蓮華経 写本 2面 面6行
- (二) 張義下西沟峴発現 8. 妙法蓮華経 写本 蝴蝶装32面 其中10面空白
（この写本が『考古』1974に紹介されたものらしい。）

十三 内蒙古文物考古研究所蔵品

18. 妙法蓮華経観世音菩薩普門品

刻本 残葉一紙 封面（P. 230）

いずれも詳細はわからない。

- 10) 以下、西夏語音の再構成は筆者の体系（1980年案）を用いている。問題点は若干残っており、今後修正したいが今はこの案による。「西夏語韻図『五音切韻』の研究」（上・中・下）『京都大学文学部研究紀要』No.20-22、1981-83。
- 11) 両テキストの異同は、声母・韻母と声調の関係で示した。上段は音形式の相違する個所を、下段は相違点を具体的な形で示した。
- 12) 漢訳ガラニの分解は、岩波文庫本『法華経』にしたがった。ただし、文庫本で郵楼哆郵楼哆_{三十八} 橋舎略_{三十九}とあるところは、郵楼哆郵楼哆₃₈ 橋舎略₃₉に改めた。××反という音注は西夏語訳で考慮されていたか否かははっきりしない。塚本啓祥「法華経陀羅尼呪の覚え書」『法華文化研究』第4号（1978年）と辛嶋静志『妙法蓮華教詞典』創価大学2001を参照して、参考のために該当する梵語形をあげた。
- 13) 咩は羊の鳴き声と注される擬声字。『龍龕手鑑』に迷爾切とある。mīeとする。
- 14) 秩は広韻・切韻にはない。袞＝袞 zhǐ 真一切（證質）（漢語大詞典による）

付記

西夏訳法華経刊本に木活字本が含まれている可能性は少なくないが、断定し難い。華嚴経などの場合も同様であるが一枚刷の右端中央部に丁数を示す文字が入っている。たとえば𑖦𑖪𑖫𑖬 (法華第一) とある。一枚に20行が刷られ、それを5行毎に四つに折るのが通例であるが、折り方に三つの型があることがわかった。(ほかの可能性もあるがここで扱う法華経について言えば三種に限られる。)

A型 5行ごとに折る。丁数を示す部分は紙縫される前の一枚の下に入る。つまり紙縫した個所を折る。

B型 紙縫した前の一枚の右側に一行ずらして折る。つまり紙縫の個所により一行右側で折る。

C型 折り目があとの一枚の二行目にある。つまり紙縫の個所により一行左側で折る。

A型の場合が一番紙縫がはずれ易いように思える。

(にしだ たつお／京都大学名誉教授)